

ライフデザイン学部での15年間は学びの時

健康スポーツ学科 杉田記代子

私は2006年4月、新設されて2年目のライフデザイン学部に着任いたしました。当時はまだ「ライフデザイン」という言葉は広く世に知られていない状況であり、まして「ライフデザイン学」とは何かとの思いでの着任となりました。しかしこのライフデザイン学部3学科の多方面にわたる幅広い専門領域が融合された環境は、研究のみならず実務業績を積み重ねられている先生方、また他キャンパスの先生方との出会いの場でもありました。私は新鮮でかつ貴重な経験をさせていただきながら、充実した日々を過ごすうちに15年の時が流れて退職を迎えることが出来ました。このように思えますことは、多様な専門領域の教員の方々、慣れない業務を支えて頂きました事務職員の方々、若いエネルギーのすばらしさを感じさせてくれた学生、またその保護者の方々に感謝申し上げます。

偶然のご縁から東洋大学へのお話がありました時、それまでの私が身を置いていた職場環境とは全く異なることから着任への不安もありました。しかし、あらゆる人々の豊かな生活、特に健康づくりに貢献できる人材を育てるという学部・学科のポリシーに共感し、私が臨床実務の中で感じていた「医療・福祉・教育の連携」をよりスムーズにするためには双方理解が必要であり、そのためには幅広い知識と柔軟性を持ち実践力のある人材を育てることが出来ればとの期待がありました。現代社会において、多くの人々が日々の生活を送るため社会的にまたは個別支援を必要としていると考えます。特に自然災害やこのコロナ禍などにおいては、支援を必要とする人と支援を提供できる人を、そのニーズに合わせて適切に繋いでいくことが重要でしょう。つまり、他者を思いやる心を持てるかどうかだと思います。このライフデザイン学部の学生、卒業生こそは、培った知識と実践力で人々の生活を豊かにするために人に関わる勇気を兼ね備えた市民でありうると思います。そっとそばで見守る、一声かけるだけでも人の心を温かくし、あるいは横で一緒に体を動かすだけでも健康づくりに寄与しているというメッセージを学生教育の中で私が伝えようとしてきた1つです。そしてこの思いは学科の地域交流企画「Keep Active」などで学生の活き活きした活動に見ることが出来ました。私自身の大学での活動は学部プロジェクト研究や東洋大学オリンピック・パラリンピック特別プロジェクト研究などを通して専門の異なる人々との共同研究は、刺激的でいろいろな視野や思考過程を学ぶことができ極めて有意義でした。共同研究者としていただきましたことをこの場で御礼申し上げます。

改めて振り返りますと、私はこのライフデザイン学部で育てられたと感じています。多種多様な領域の専門性とその人々の思いを知ること自身で自身の視野が少しは広げられたであろうこと、教員という立場ではありましたが学生を含め多様な人々との出会いと関わりの中で育てつつ、育てて頂いたと思います。

最後に、ヒポクラテスの箴言「人生は短く、術のみちは長い（ピポクラテス全集、石渡隆訳）」を実感しつつ、退職の後は何らかの形で「医療・福祉・教育」の隙間を繋げていくことに関わりが持てればと考えております。

改めて、今まで東洋大学での日々を支えて下さった先生方、職員の皆様に心から御礼申し上げます。

そして、ライフデザイン学部、また赤羽台キャンパスでの益々の発展をお祈りいたします。

朝霞キャンパス研究室にて



ゼミ学生：コロナ禍のためマスク着用での対面授業（2020.12 撮影）